
風の魔導師

汐渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の魔導師

【Nコード】

N4493BA

【作者名】

汐渚

【あらすじ】

全ての物は化学や物理で実証され、事象はすべて数学で計算される今この頃。

剣や魔法の世界はゲームやファンタジーの中だけ。そんなもの存在しない。

ここに、この世界の全てが灰色に見えて、何もかもがつまらないと感じる少女がいた。

彼女の名前はユカ。

夢見る彼女が唯一興味を持っているのは、「魔法」というものだった――

彼女が自分自身の真実を知った時、運命の歯車が動きはじめる。

例えそれが…どのような結末だとしても。

プロローグ（前書き）

昔、別の小説サイトで投稿していましたが、友人に誘われてリハビリのために書いてます。

ちなみに、元々はRPGゲームを作るために作られた物語です。

よろしければよろしくお願いしますm（　　）m

プロローグ

日の光が赤くなり、太陽が傾く夕時。

「ねーねー、おじいちゃん！」

「…なんだい？」

おじいちゃん、と呼ばれた老人はベットから上半身を起こし、小学生くらいの少女をゆったりとした笑顔で見た。

「またあのお話ししてよー！」

「ほんつとうにユカは好きだよなあ…。」

ため息と共に、少女と同じくらいの少年が口を尖らせて言う。

「よしやくんは黙っててよ！」

少女が怒鳴ると「よしや」と呼ばれた少年はへいへい、とボソボソ呟き、床に座り直した。

「ユカ、友達にはキツく当たっちゃダメだよ？」

「はーい！」

「ユカはじーさんには、すなおだよなあ…。」

「うるさいよっ！…でさ、早くしてよー！」

少年ももう諦めたのか、呆れたのか定かでは無いが反論しなくなった。

「そうだな……」

この老人の話はとても神秘的だった。

魔法と共に暮らす人々や街のこと、この地球では有り得ない生き物モンスターやそれと戦う人々の話……などなど、その老人の話は尽きず、特にユカと呼ばれた少女は毎日、学校から帰ってくるとすぐにランドセルを放り投げ、友人の義哉よしや、――先ほどの少年――を引き連れ、自分の祖父の元に走って行き、夕飯の時間になるまで聞き入るのが日課になっていた。

……一方の義哉はというと、やはり思いっ切り遊びたい時期、みんなと一緒にサッカーや野球や集まってゲームなどをしたかったが、なんだかんだでユカと一緒に話を聞くのが楽しかったし、何より彼はユカに少し気があったため、毎日呼ばれてる身の彼としてはもしかしてユカは自分のことが……という思いがあったのかもしれない。もっともユカはただ友人の一人で、自分の言うことをある程度聞いてくれ、かなり親しかつたため連れていただけなのだが。

「……そろそろ夕飯じゃな、二人とも、そろそろ行きなさい」

もう陽も落ち、あたりは暗くなっていた。

「はーい！ あ、よしやくんちょっと話があるんだけど……来てくれる……？」

「ん…？ いいけど？」

そのまま、ユカは義哉を連れて部屋の外へ出て行った。

「……若さとは…いいものじゃな…」

残されたか細い老人は独りそう、呟いた。

プロローグ 2

—10年後—

「——て！——くん！」

誰だろう。

こんなに眠いのにな、こんなに動きたく無いのに誰かが自分のことを呼んでいる。そう、少年は思ったが、それ以上に眠い。この眠気を取るにはきつと熱々の濃いコーヒーか自称『魔法薬学に基づいて作製した身体能力アップ薬 ver. 2』を飲むのがいいのだろう。後者はこの世の終わりを味で見事に表現していたが：

「起きて！義哉くん！」

「うおうっ！？」

少女がイスごと義哉と呼ばれたを倒したので、彼は起きざるを得なくなってしまった。

「っ…て……なにすんだよ！」

倒された義哉が見上げると、そこにはオレンジのセミロングの髪、目は藍色でくりくりしており、身長は低めだが、存在感は人一倍の少女—ユカが立っていた。

彼女は自称、未来の魔法使いの女の子で、クラスメイトからは厨二病とか言われて居るが、もしかしたらそれが彼女の童心を忘れないいい面なのかも知れない。

「なにするって…もう授業終わってるんだよ？」

義哉の周りからクスクスという笑い声が聞こえてくる。クラスのメンバーからすれば、見慣れた光景だからだろう。

「ああ…で？」

「で？じゃないよ！早く部室に行こう！」

と、言うよりも早く、ユカは義哉をつれて2年4組の教室を飛び出し、義哉を階段の脇の部屋の前に連れて行った。

部屋のドアの上には、「写真部暗室」と書かれている。

「ふう…またか…」

義哉は心の中でため息をつき、扉を開けた奥に進んだ。

開けた先には、短い廊下の先にある扉と、掃除用具のロッカーがあるだけで、彼らはそこを通り過ぎて、その先の扉に入った。

「さあ、今日も頑張ろっ！」

扉の先には、写真部の暗室には似つかわないうさまざまなものが置い

てあった。

まず目に付くものは、小説やアニメで魔女が毒々しいスープを作るために使うような大きい鍋（魔法薬学に基づいて作製した身体能力アップ薬ver. 2もここで作られた）がドシン、と真ん中に置いてあり、他には様々な薬が入った薬ビンが置かれている。

「やっぱり、ここが研究には一番よねー…」

ユカはそう呟くと、壁に掛けられたほかの教室からパクって来た小さな黒板に教室授業中に思い付いた魔法陣らしきものを書き始めた。

そう、この写真部の暗室はユカに占領され、魔法の研究に使われているのだった。

ところで元々の写真部の方かというと、ここに居る義哉が部長で、ほかに部員は（幽霊部員と、「名義上」部員となっているユカ以外）居ないという状況になっている。

実は、写真部に1、2年生が居らず、3年生が引退した時に義哉に部長権限が渡されて、それを聞き付けたユカに部室を奪われてしまった…という、あるいみ写真部の先輩にとって悲しい過去があるのだ。

「ん…これもダメかあ…」

ユカは、ダメだった魔法陣をノートに写し、スミに「失敗」と小さく書いた。

彼女は、こうやって今まで研究して失敗した魔法陣や、魔法薬を作

った行程などとともに全て記録して、暗室（いや、研究室と呼ぶべきかもしれない）の、棚に全てしまっている。

今のところでも、ノートの数で30冊は越しているという隠れたものすごい努力家なのだ。

しかし、悲しいのはその努力のすべてがこの魔法の研究に使われていることだろうか。もし彼女が化学や、物理、数学などの物にその興味が向いていたとすれば、彼女は日本を代表する博士になっていたのかもしれない。

「んー…この部分、このページのここに似てるから、これを参考に替えてみたらどうだ？」

「あ、なるほど！確かにそうね！」

義哉がユカの「魔道書」のページを開いて、わからないながらも、ユカにアドバイスをする。

ちなみに、今義哉が持っている本「魔道書」は、ユカのお爺さんの遺産で、その魔道書を元に、ユカは魔法陣を作ったり、薬を作ったりしている。ただし、薬に関してはその材料そのものが無いため、代替品をつかっているのだが。

これが、義哉の日課であり、彼にユカが与えた義務でもある。

また、彼女が作った魔法の薬を飲むのも彼である。

義哉としても、ユカの言ってる「魔法の力の法則」などの用語についてはちんぷんかんぷんだが、彼女を部室で一人にするわけにもい

かず、暇つぶしにもなるため、このように協力している。

「もう遅いし、そろそろ帰ろっか。」

「そうだな…。帰りにコンビニでも寄って、チキンでも買おうぜ？
今日はおごってやるからさ。」

「本当に！？ありがとう！」

…彼女の笑顔を見ることが、彼にとっての日課でもあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4493ba/>

風の魔導師

2012年1月13日21時53分発行